

◇シンポジウム◇

パネルディスカッション

パネラー：佐々木雅幸・谷 富夫・山崎孝史
コーディネーター：土屋貴志

土屋：それでは第2セッションのディスカッションに入ります。今日は教員だけでなく卒業生や大学院生・学生も来られていますので、話しやすい雰囲気をつくるために、敬称は「先生」ではなく「さん」で統一させていただきます。

フロアとの討論に入る前に、もう一人のパネラーで第1セッションの司会もされた山崎さんから、谷さんと佐々木さんのお話を受けて、補足の発言をお願いします。

山崎：外部資金への申請を出せということ、最初に都市研究プラザから言われて、どうしようかなと思っていた時に、頭脳循環のプロジェクトが始まりました。全学的観点から構想するというので、その時に、文学研究科、あるいは都市研究プラザの研究が、アジアにシフトし過ぎていたという感触から、地中海をテーマに据える研究のプロジェクトを立てました。これは面接まで行ったんですが、落とされたんです。その時、「市大の文学部ってアジアの研究をしているでしょ」って言われたので、そういう形でのアイデンティティっていうのがなんとなく出来上がっているけれど、これをやっぱり広げていく必要があるというのを感じました。それは後に、地理学専修の大場先生とかが、EUを中心として、つまり西洋史、あるいは英語圏ではなくドイツ語とか研究している人たちも加われるというプロジェクトとして展開しています。

その次は「卓越した大学院研究形成支援補助金」というのが出るという話でした。これはグローバルCOEじゃなくてポストCOE事業として展開されるので、文科省がCOEに採択された大学の中から白羽の矢を立てて決めるらしいということで、それで私にその青写真を書いてくれと言われて、佐々木先生とも相談させて頂いて「第二都市論」でいくということにしました。そのときは、先ほども出た、グローバル化の中で変革が必要とされ、それが大学の将来的方向性を規定していくという話をして、ポストグローバル化時代に大学における研究をどういう形で再定義していくかという内容で出そうと決めました。それでも結局は特定の専修に偏って、選択と

集中というレベルでのプロジェクトとして、特定の専修の中に重点的な研究領域を作っていくという形でやっていたわけです。これも結局、白羽の矢は立たなかったのですけれども。私もいろんな条件があって、結局地理の一教員として関わるできませんでした。

私自身そういう形で「外部資金があるから、あれこれせえ」って言われて、そのたびにかき立てられるのは本当に嫌で、やらないと仕方ないんですけども、そういうことが自分にできるのかなって逆に考えてしまう。私が着任してから教員個人データ集を作るという話があったのですが、谷先生もおられた時で、あのころ若手に「これをしろ」というのは本当にひどかった。私にこのデータ集を作れと言われて、何に使うのかというのについて榮原先生と中村先生の意見が違ったんですけど。そういうことですごくこき使われてた中で、全研究科の研究を俯瞰していると、結局、大阪における都市研究の拠点というものを、最も市民や府民に、府民を含むかどうか議論ありますけれど、対外的にアピールできて、しかもお互い研究者としても関心をもってできるようなテーマっていうのが見えてくるのかなって思ってきました。そういうふう思いながら、嫌々なところもかなりあるんですけど協力してきた。だから、この佐々木先生のご発想とやや似ている所もあるんですが、この4専攻14専修っていう、古くさい寄せ集めのような所に、その上に対外的にも対内的にも、都市文化研究センターから出てくる研究のフロントというものが見えてくるっていう、重層的な仕組みの中で自分の職場を捉えたらどうだろうと思うんです。

そうしているうちに、私はなぜか知りませんが中川（眞）先生に、平田（オリザ）先生が加わる新領域（創成研究）のパートナーをさせられました。私は沖縄の基地研究をやっていて、どっちかというところから軍事とかですから、破壊系の研究をしてるんです。それを、平田先生みたいなクリエイティブな、創造系の人、何か創るっていう観点から研究される。結局、それは研究としては全然進まなかったんです。だけど私のフィールドはコザという

都市、今は沖縄市になっていますが、そこは基地の街で長らくいろいろな紛争もあって、同時に、今それが衰退している所でもある。そこでどういう事態が起こっているかを見る視座は、破壊という視座だけではなくて創造という視座から見る必要があるというのが、実はそうした創造都市の先生方との交流や関係を通して見えてくるようになった。それまでは別に自分は都市の研究者と思っていなかったのですが、都市の歴史の1つとして創造性の重要性に気がついた。コザは那覇に比べて衰退しているんです。それは佐々木先生のおっしゃる「衰退都市」です。沖縄市は沖縄における第2都市なので、大都市ってというのはあらゆる所で主要都市の衰退とか現れていて、老朽化っていうのが非常にあるので、そういうことを見る視座もできてきたというふうに思います。

これもやっぱり、この研究科に籍を置かせて頂いてる上で獲得できた視点かなと思うんで、自分の研究に支障ない範囲で、積極的に協力させて貰っています。

土屋：ありがとうございます。塚田さんの手が上がりますので、是非ご発言よろしくをお願いします。

塚田孝：日本史の塚田ですが、文学研究科のCOEプログラムについて、私の印象と違うことがあります。プログラムの当初計画ではヨーロッパも含めた研究計画でした。私も拠点リーダーの阪口さんとロンドン大学のガーストルさん（近世演劇）との共同企画でロンドンに出張させていただきました。地域としてのヨーロッパや領域としての言語文化なども含む事業でした。しかし、たしか2年目が終わった時点で行われた中間評価の中で、事業計画が総花的でアジアの方にシフトしろという示唆があり、それでプロジェクトチームの再編が行われました。当初、Aチーム（比較都市文化史）、Bチーム（現代都市）、Cチーム（都市と人間）という3つのチーム編成だったのが、地域毎の研究プロジェクトに再編されたのです。そこで私はAチームだったのですが、大阪プロジェクトに属することになりました。あと2つのプロジェクトは東アジアと東南アジアだったかと思いますが、はっきり覚えていません。いずれにしても、COEプログラムは文学研究科の3専攻全体が関わる形で取組まれたものでした。研究チームが再編されて、アジアに重点がシフトしましたが、それぞれの方の関心によって多様な関わり方が可能な形で開かれていたと思います。

文学研究科の創立50周年のシンポジウムの時は、COEプロジェクトも採択され「これからやるぞ！」という雰囲気だったと思うのですが、今回の60周年シンポジウムは、これでよかったのかというような、なにか非常に後ろ向きな雰囲気が漂っており、こんな後ろ向きで60周年を迎えていいのかという危惧を持った次第です。もっと前向きに、これまで推進してきた都市研究がどんな意味を持っていて、しかし、都市研究に関わりにくい分野

もどういうふうにやっていくのかということを積極的に議論していく必要がある。せっかく60周年ということで皆さんお集まりになっている所で、議論の仕方が違うのではないかと、ちょっとそういう疑問を感じるというのが、まず1点です。

それから、せっかく佐々木さんにご報告頂いたので、ちょっと歴史に関わる所について発言しておきたいと思っています。大阪は早すぎた創造都市だったというようなことで、聖徳太子が四天王寺に悲田院などの四箇院を設けて、貧民救済を行ったという例などをあげられていました。しかし、これは歴史的事実ではありません。10~11世紀ごろに作られた四天王寺の縁起で言われるようになる由緒であって、それは近世大阪の非人集団（垣外仲間）も自らの社会的な有用性を主張しようとする際に、その聖徳太子の「貧人」施行の実務を手伝った者の子孫だという由緒を創り出します。

そうした由緒がどのように社会的に機能したかということを実証的に研究していくことはとても大切です。しかし、そうした由緒を歴史的事実であるかのように考えて、その上に立って大阪という都市の性格というようなところへつなげて行くことは、ちょっと問題があるように思います。

少し、佐々木さんの報告とは話は離れますが、「歴史」を町起こしに活かすというようなことをよく耳にします。その場合、「歴史」を観光「資源」化することで、その地域で積み上げられてきた歴史の総体を把握するのではなく、特定の「商品」化しやすいものだけに注目することで、結果として歴史の部分化がされてしまう欠陥に陥らないよう注意しておく必要があると思います。

土屋：前半のコメントについては私があとで答えますので、後半のコメントについて佐々木さん何かあればどうぞ。

佐々木：後でまとめて応えたいので、コメントが他にもあればお願いします。

土屋：それでは、前半の、後ろ向きだっということに関してですが、山崎さんもある程度、そういう思いがあったことだと思うし、じつは多少挑発しているところもあるのですが、50周年の時には確かに前向きで行こうということでもよかったんですが、先ほど少し申し上げましたように、この10年間、はっきり言ってこの流れに乗っていない専修もあるわけです。あえて乗らなかったというのもあるのかもしれませんが。そのことを置き去りにしたまま、もっとどんどん行きましようというわけにはいかないだろうというのが、我々の企画側の判断です。つまり、1回は後ろ向きの議論もちゃんとしたいほうがいいんじゃないかっていうことです。それをちゃんと押さえておかないと。さっき谷さんもおっしゃったように、一応、一丸になっていくぞっていうことはあ

たと思うんですけども、その中でも温度差があったってことを置き去りにしたまま進むわけには行かない、そういう趣旨がありまして、あえてその影の部分というところを指摘して頂いてるってことでもあります。

塚田さん何かプライアありますか。

塚田：そういう「乗れなかった」という自己認識の方もおられるかもしれないと思うのですが、文学研究科全体がその人を切り捨てるというようなことはなかった。これまでやってきた文学研究科は、都市研究を前面に掲げながら、それ以外のことも含めて、いろんな学問分野を大切にしていこうという合意は、ずっと存在し続けていると思うし、そのことは皆さん、共有しているのではないかなと、私は思っています。

土屋：逆に、影の部分も見えておかないといけないっていうのは、あまり積極的に乗れてこなかった専門分野が、これからどうやって乗っていくかという話でもある。そういうことも含めての議論だと思って頂ければと思います。

では他の方、できるだけフロアから意見を伺いたいのですが。はい、山さん。

山祐嗣：心理学教室の山と申します。私はここへ来て3年目でとくに何もしてなかったんですが、非常に面白いお話をありがとうございます。今、塚田先生から後ろ向きじゃないかというふうに言われたんですが、私は心理学で文化みたいなものに携わっているんです。つまり、文化っていうのは私たちが、あるいは祖先が生き抜いていくため、生存し、あるいは繁殖のために解決しなければいけない問題を解決するために作ってきたというような視点を私は持っています。

そういう面から見ると、実は今、都市っていうのは、私もしくは私たちの周りで、かなり興味を持たれている領域でして、今日のお話の中に、例えば、その都市とはいったい何なのかというのについて、適応論的視点というのが入ってくるかなと思います。それこそヒトが進化したのは基本的に狩猟採集を行う中で、完成したのが20万年前、あるいは脳ができた5万年前というふうに言われてるんですけど、そういう視点からすると、都市や文化というのはものすごく新しく、暴走としか思われられないようなことがある。そういう適応という視点というのは、どなたも使っておられないのかなと。

この視点をもうちょっとさらに都市という所に織り込めればと思います。基本的に祖先は自給自足をやってたんですけども、それがいろいろな生産ができるになると、自給自足から抜けた所で、社会交換する場を作ったという、そういう視点で考えておられる先生はおられないのかなという質問です。

土屋：それはどなたに？

山：とりあえず佐々木さんに伺えればと思います。

佐々木：ご指摘のように注目すべきは都市の成長スピードですよね。やはり産業革命以降の爆発的な伸び方は、まさに暴走とでもいうべき成長ですね。これに伴って地球に住む人類の数も爆発的に増えます。「消費」は欲望を解放する体系でもあって、資本主義的市場のもとで全面的に開花しながら進むので、急速に人類という種が増えすぎると、全体としてアンバランスな発展を導き、結果的に地球環境の破綻が生じる。この問題は、国連が「持続可能な発展と都市発展」のようなテーマで取り上げています。この持続可能性の議論と、都市の発展と、人類の進化や脳の進化との関連で、地球環境の維持可能性との間には、非常にアンバランスがありますね。

それから塚田さんには普段から批判を頂いていますが、都市とその言説が持っている意味をどう理解するのか、どういうふうに取り取るのかというのは、私は実は好きなテーマです。何故そういった言説が生まれてきたのかということの背景と、現実の都市の分析との関係性については、ずっと私が底流に持っていたんです。だから、そういう意味で、あなたの言っていることは認めます。認めたくて、そういった研究手法はありだろうと。フランスでそういった議論ができるのは、やっぱりなかなかたいしたものだと思います。

つまり、ある意味、都市[言説]がシンボル化していった、そのシンボルがどう消費されていくかということについては非常に関心があります。ありがとうございます。

土屋：それでは他におられますでしょうか。

壇上から見ていると当てたい方はたくさんおられるんですけども、その前に、午前中のセッションに参加されていなかった方もおられますね。午前中に海老根さんが問題提起されたことが、その前のお三方と少し趣が違っていました、レジュメでいうと14ページになります。ただ、ここに明示的に書かれていることではないんですが、海老根さんのご発言の中で出たことで、この文化という部分と、それから、卓越性というか、エクセレンスへの移行ということです。文化というのは、国民国家の主体の生産として、教育と研究を結びつける役割を果たしていたんだけど、私の理解で簡単に言ってしまうと、グローバル化と共に、文化からエクセレンスへ移行した。つまり、国民国家というまとまりがなくなってきていて、エクセレンスという、ある種閉じた指標に変化していく。大学の中もです。そういうお話があったと思うんです。

今、ちょっと文化の話で議論してたんなんですが、むしろ文化っていうのはモダンな、もう古くなってしまった時代の枠組みの中に入ってしまうわけで、ポストモダンの時代、我々が21世紀に入って取り組んできた中身っていうのは、エクセレンスのほうに行っている。我々の都市文化研究っていうのも、ある意味、エクセレンス

の獲得に向かっているんだってということになるかどうかです。

このエクセレンスって西洋語は、哲学・思想史のほうでいうと、古典古代で言われていた「アレテー」というギリシア語の英語訳でもありまして、アテーナイとかのポリスの中で、ある意味当たり前として価値観が共有されているなかで、アレテーつまりエクセレンスということが言われていた。そういう意味ではグローバル、あるいはモダンという枠組みとは、やはり違った意味合いを持ってたはずで、それがこのグローバル化の中で、また復活してくるっていうのは、思想史的に見ても興味深いのです。

このあたり、もう1回、海老根さんに午前中の議論を説明して頂ければと思います。

海老根：私が話したのは、エクセレンスの台頭が国民国家の衰退と表裏一体の関係にあるということです。近代社会では大学は成熟した市民を養成する国民国家の重要な一機関として存在してきましたが、そこでは文化という理念が市民社会の統合原理として重要性を獲得し、大学における研究対象にもなった。それに対して、佐々木先生がおっしゃったような資本主義がグローバル化した今日では、資本主義の繁栄と国民国家の繁栄が必ずしも一致しなくなってくる。そのような局面において、エクセレンスが大学に関する新しい理念として出てきたということです。この変化が意味するのは、文化というものが、もはや規範的な理念として機能しなくなったということです。例えば、大学で教えられ、研究されてきた文化というものを考えてみると、もちろんすべての文化が大学で教えられたわけではないんですね。例えば国文学では、日本語で書かれたすべての文芸ジャンルのすべての作品が扱われたわけではなく、特定のジャンルの特定の作品が選ばれてきた。まともな成熟した大人だったら、これぐらいのことは知らないといけない、こういう作品は知ってなきゃいけないという規範が明確に存在し、それが研究対象の範囲を設定していた。しかし今やそういう規範性としての文化は失われてしまったということです。

その結果、市大の文学研究科で言えば、表現文化専修のようなもの、要するにカルチュラルスタディーズみたいなものが大学の学問分野として制度化してくる。こうした学問には、基本的に規範的な文化を批判するっていう軸があるんですね。つまり、国民文化と同一視されてきたハイカルチャーの特権性を批判する。ハイカルチャーによって代表されていないような人たちの作品を読んでみる。そういう形で新しい文化の学問が立ち上がってきて、アジア都市文化学というの、基本的には、そうした動きのなかで成立してきた分野なんじゃないかなと私は思っています。まとめると、グローバル化の進展の中

で文化の位置づけが変わってきた、相対的に言えば、文化はかつてほど重要ではなくなってきたという話をしました。

土屋：確認ですけれど、文化とおっしゃったのはBildungでいいんですね。

海老根：そうです。ここでの文化という理念にはカルティベーション（人格の陶冶）という意味も強く含まれています。ドイツで出てきた文化の理念はBildung（教養）という概念と密接に結びついています。

土屋：ただ、Bildung（教養）ということになると、たぶん教養教育と専門教育という、もう1つの軸が入ってきます。ちょうど今この会場（文化交流室）の外に展示されていますが、大阪市大の中でも教育システムのあり方、とくに全学共通教育のあり方っていうのは、ずっと議論になってきています。どこで教養教育に区切りをつけるのかとか、そもそも全学的にやるのかというようなことが議論されてきました。

海老根：戦後の日本の大学の教養教育はドイツのシステムを輸入したアメリカのモデルに基づいているのでしょね。それと市大では共通教育は4年間通して学べるということになっていますが、実態は専門の前、1・2回生で学ぶ昔の一般教養のようになってしまっています。あとCOEの話でいうと、私は塚田先生がおっしゃられたヨーロッパ部門の廃止後にこの大学に来たので、直接は関わっていないのですが、たぶんCOEでやろうとしたことというのは、それまでに各専修でなされてきた研究の蓄積の上にあったのだと思います。その蓄積があったからこそCOEを取れたのでしょうか。ただ、実際にCOEを始めるにあたっては、それまでの専修単位の枠組みから一歩外に出ようという方向性があったんじゃないかと想像します。つまり、国文学、日本史学、東洋史学、西洋史学、地理学、社会学などなど、市大文学部というのは、先ほど「細切れ」と山崎先生がおっしゃいましたが、非常に古典的な学問分野、ディシプリンの区分を、いまだにずっと保持しているわけです。しかし、COEというのはそこから一歩抜け出して、都市文化研究センターに集まって、何か新しい試みやろうということだったのではないかと。ひょっとしたら、塚田先生や谷先生がおっしゃった皆で一致団結してやろうとしたというのは、そういう感じだったのかなと想像しています。

私がいまの都市文化研究センターに関して思うのは、そのあたりの実験性が感じられないということですね。専修単位でなされている研究のディシプリナリティーに対置されるような都市文化研究センターの方向性というのが、あまり見えてこない感じがします。私個人としては、そうした実験性を軸にして都市文化研究センターを立て直すなら参加してみたいという気持ちはあります。ただ、その場合、あまりにも大きなテーマだと焦点がぶ

れて輪郭がぼんやりするので、小規模から中規模程度のプロジェクトをいくつか都市文化研究センターで走らせるような形にすれば、私でも都市に絡んでできることもあるかなと思います。

土屋：ありがとうございます。海老根さんに復習も兼ねてご意見頂いたんですけども、今のお話でよろしいでしょうか。また、フロアの方、今の海老根さんのご意見等に関して、何かコメントのある方、おられませんでしょうか。

大場茂明：地理学教室の大場です。今年度から UCRC の所長をやっております。ちょっと前から、今、海老根さんが言われたセンターのコア会議に出るようになりましたが、あまりにも扱う項目が多いのです。それをコアメンバーと言われている 20 名くらいでコントロールして、その先に何が創造的に生まれてくるのか。コア会議を運営していて非常に疑問に思っています。先ほどからいられています「選択と集中」ということと、それから今まさに海老根さんがいわれた大きなプロジェクトですが、それは全体を覆うようなものではなくて、むしろ中規模ぐらいのものです。

たとえば、たまたま私が代表をやっています「EU トランスネット」という、頭脳循環のプロジェクトがありますが、これはやっていて非常に面白いです。半年ぐらいいは、お金を貰ったからとりあえずやっていたのですが、ポローニャに会議に行ってから、がらっと変わって、若手の人たちを派遣するだけではもったいなくて、自分たちでも研究をしたいという思いが非常に強くなってきました。そういった刺激というのは、UCRC のコア会議そのものから生まれてくるというよりも、今度こういったプロジェクトで、こういったメンバーで出したらどうかとか、先ほど塚田さんが言われたんですが、今度はアジアではなくヨーロッパにシフトしようとか、山崎さんからもいろんなアドバイスを受けながら、頭脳循環のプログラムをどういうふうにしようかと議論していく中で出てくるので、そういう話が非常に面白かったですね。

今の UCRC というのは、コア会議の運営のほかに、いろいろな関連してくる研究会などがたくさん出てきています。ただ、まったく私の個人的な印象から辛辣な言い方をすると、それがあまりにも細分化されすぎていて、結局、個別に分かれている専修がまとまる 1 つの傘として作られた UCRC が、またそこで別の角度から細切れになったものを出してきてしまっている。そうすると、特に若手のドクター研究員の皆さんは、ある面非常にお気の毒だと思わなければならない。そういう中で、自分の軸足をどこに置くのか。そういう点を考えると、けっして内向きの議論ではなく

て、UCRC をもう少し実体のあるものに変えていくきっかけが、例えば今日のシンポジウムではないのか、そういう感想です。

土屋：とくにお答えはよろしいですね。時間はあと 10 分ちょっとです。是非この場で、できるだけ多くの参加者の方からご意見を頂きたいのですが、いかがでしょうか。あるいはパネリストの皆さん、何かご意見とかありますか。

山崎：私も都市文化研究センターに関わってまして、大場先生と同じ気持ちを持っています。やっぱり 4 専攻 14 専修の持つ力学に押し戻されるっていうことも、ちょっと感じていました。その組織力のほうが強いんで、それを横断的に、誰が、どう、何を被せるのかとなると、難しさがあります。ちなみに私が「卓越した大学院研究拠点」の時に書いた青写真は、専修再編はしないという前提で、その上に横断的に第 2 都市論の専修を作るというような二層制でイメージしました。

本当は我々文学研究科の組織も、単純に組織図を書けば 14 専修横並びになるのですが、アジア都市文化学は戦略的なフロントとして作られているし、人事配置において都市重点枠を提供されている専修もあるので、横並びの間に実は格差的なものがある。そういう構成は、COE と、先ほど谷先生もおっしゃった専修再編の中で、もともと我々が選択したものであったはずですが、そうであれば、都市文化研究センターの中では、そういう重点化されているところを軸に、どういう研究の項目を作っていくかということ、もう一度改めて議論する必要があります。

ただ、新しいことをしなければならぬのに、文学研究科には長い間人員が付かなかったのです。各専修の教員数は標準 4 人にせざるをえなかったのに、そこにまた重点枠とか、重点的な研究を走らせようという難しさがある。ですが、今の人事がある程度動いていって、重点配分が可能になってくれば、そういう動きを作っていくことができるようになるのかもしれない。まず基礎研究としての専修は維持して、二層制にしていく。つまり、1 段めはそれぞれが基礎研究しているけれども、戦略的なプロジェクトに関しては、文学研究科の組織の中にインプットされた格差みたいなものを活かすような形で対処していく。そういう実質的な取り上げ方をしていくしかないかなと思います。

あと 1 つ、プロジェクトメンバーを構成するときには、その人の研究テーマのキーワードを重ね合わせて、論理式でいう「and (かつ)」で選ぶことが多いんですが、「or (または)」で選んではどうかだと思います。「都市研究」でヒットする人、「文化研究」でヒットする人、「アジア研究」でヒットする人、という形でリストアップしたあと、たとえば「都市研究かつ文化研究」と狭めてヒッ

トする人を選ぶのではなく「都市研究または文化研究」でヒットする人というふうに、広げて考えましょうということです。

土屋：フロアで手が挙がってますので、どうぞ。

渡邊倬郎：私は今68歳です。41年間大阪府立高校の社会科の教師をして、2009年3月完全退職してから、慶応の通信制に入学し、2012年9月卒業と同時に「憧れの市大の哲学専修」を受験して、合格できました。

市大が、何故「憧れ」といえば、「文学部」ということです。長い間高校の教師をやっている痛感しているのは、先ほどの議論との関わりでいえば、今は高校でも「特色ある学校作り」などということで、総合学科だとか何とかだとか、いろいろやっていますが、私がずっと言っていたのは「普通科が一番いいんだ」ということです。高校でいえば普通科というのが教育の原点なんだということを主張し続けてきたんです。市大は文学部であり、哲学専修があるという形がきちんとあって、基礎的な演習をやってくれている。今、私が、そういうところの院生でいるということは、本当に夢のような気持ちです。

だから、是非、今後もこういう教育体制を続けて頂きたいと思います。今までの議論を聞いていて、山崎先生が言われたような、平等を保障してという観点を持っているというのは、すごく嬉しいですね。また、塚田先生が言われていた、大阪の由緒とか培ってきたものがあるのだけれど、文楽など随分攻撃されている。この市大には、そういうことに対して、やはりきちんとした形で政策をリードしていくというような、大事な役割があるのかなと思います。今日は参加させて頂いて、発言までできて、すごく良かったです。どうもありがとうございました。

土屋：ありがとうございます。本当は、二層構造というか、各ディシプリンの専門的教育の上に、リーディング的なプロジェクトつまり学際的ないは総合的な学問研究を、しっかり重ねられる体制ができるのが一番いいわけですが。けれど、実は谷さんがおっしゃったように、スタッフの数が減らされる中で、都市文化研究を打ち出してこざるを得なかった。それは、ある種、生き残り戦術のようなものでもあったわけですが、結局はその二層構造を、人員が減らされた中で作らなければならなかった。これはもう、単純に、マンパワーが足りないというしんどさがあります。それは否めません。

つまり、やるが増えたんだから、教員を増やしてくれるのが一番いいんですけど、逆境の中でやっていかなきゃいけないというしんどさがある。それは、都市文化研究のプロジェクトに、単に乗り遅れたとか、乗れなかったってということだけではありません。基礎的な学術教育をしっかりとやらなきゃいけないというのが、

我々の第一の任務なのです。私は1994年に市大に来まして、もうすぐ20年になりますけれども、1990年代はまだ基礎的学術教育をしっかりとやっていたらよかったし、そのための人材的、人的余裕もあったのです。哲学専修のことばかり例に挙げて申し訳ないんですが、私が来た20年前には哲学の教員は10人いたのです。それが今は4人しかいない。その4人だけで哲学の学術的・学際教育がしっかりとできてるかという、実はそれはかなり心許ないです。その上で、なおかつ都市文化研究までやるっていうのは、かなりしんどいのです。私個人は4足ぐらい学際研究の草鞋を履いて人間なんで、もう1足ぐらい増えてもまあいいかなというところはあるし、関心もいろいろあるんですけども、現実的にはそういう人手がない中で、学際プロジェクト研究もやっていかなきゃいけないしんどさっていうのは、確実にあります。

自分がしゃべってしまってますみません、あと5分ぐらいですが、はい、川野さん。

川野英二：社会学の川野です。私は、こちらに来ましたのが2010年で、もう既にいろいろ動いているプロジェクトに途中から参加させて頂く形になっています。私は大阪にいましたので、近くで見えて、大阪市立大学は都市研究が非常に盛んだというイメージがありましたし、その以前から個人的によく知っている先生もいらっしゃいましたので、大阪市大でいろいろなプロジェクトに参加することに、非常に期待していました。

先ほどのお話でも、基礎的なディシプリンに加えて二層構造ということがいわれていました。つまり、基礎的なディシプリンの上に学際研究という構造です。しかし、学際的というのはインターディシプリンなので、ディシプリンの間の連携をつくるものだと思います。

それから、ここでは「上から」「こういう感じでやって」ということを強く感じます。私自身は、以前から市大の先生方とも一緒に仕事をしていましたので、個人的なネットワークがありました。そうした意味で、これまでも学際的な研究から学んできたものは大きいです。現在もいろいろなプロジェクトで、地理学の先生方のほか、塚田さんや佐賀さんなど歴史学の先生と一緒に仕事をして、非常に勉強になります。たまたまですが、研究のテーマが非常に近く、縦軸という意味で今の私自身のテーマと、たとえば塚田孝さん、佐賀朝さんのテーマが重なるからでもあります。非常に研究内在的な関心で繋がっているところがあるわけです。市大に来る前でも、個人的なネットワークで一緒に仕事させて頂いた時は、非常に自分でも勉強になりましたし、研究内在的なつながりによる共同研究というのはそういう意味でもよかったと思います。

しかし、この仕組みが上から「こんなふうによれ」ということになると「やらされ感」というのが生まれる

のではないかと思います。先ほど土屋さんが言及していましたが、私たちもついていけない部分がありました。社会学はそうではなかったかのように他からは見えるかもしれませんが、たとえプロジェクト等に入ったとしても、必ずしもハッピーだったということはないのではないかと思います。これはむしろ、組織のあり方の問題があるのではないかと思います。

土屋：ありがとうございます。先ほど言い忘れましたが、「二層構造」というと確かに上からという感じがあるんですけど、必ずしも上からというわけではなくて「研究と教育は別だ」という問題があるのです。この記念行事の企画グループで議論した時にも出てきたのですが、教育としては、私はディシプリン内でちゃんとやるべきだと思ってるんです。学生を育てるには、初めから学際の中に飛び込ましたらあかんということです。私自身は学際ばかりやってきたんで、自戒を込めてそういう感覚がある。まずは基礎的なところをきちんとみっちりやる。そうして研究者になれば、お互い同士、テーマごとの関心で結びついてやらないとちょっと面白くない。まして、上からやらされたのでは面白くないので、それはその通りだと思います。

川野：今のことなんですけど、例えばCOCというプロジェクトも始まりました。ディシプリンとの関係でいいますと、社会学には、社会調査士という資格があります。授業はそのカリキュラムに合わせてやらないといけないので、ディシプリンとしての社会学の資格は全国共通の制度として存在します。それを例えば「調査実習をCOCのカリキュラムにしてくれ」と言われると、実習は社会調査士のカリキュラムにのっっていますから、非常に困るわけです。おそらく、ディシプリンがどうなっているのかを、お互いによく理解していないからだと思います。そういう意味では、もう少し内在的に、お互いにどんなことをやっているのか、どういう事情にあるのか、ということも含めて、できるだけ理解した上で協調しようとする姿勢が必要ではないかと思います。

土屋：ありがとうございます。残念ながらもう時間のほうがきてしまいましたが、今ここでどうしても発言しておきたいという方がおられましたら、是非おうかがいしたいです。いかがでしょうか。あるいは、パネラーの皆さんから何かございますか。

特にないようでしたら、このシンポジウムの第2セッションは締めさせていただきます。ありがとうございました。